
クドラクとクルースニク

ゆず胡椒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クドラークとクルース二ク

【NZコード】

N3384BA

【作者名】

ゆず胡椒

【あらすじ】

人としても吸血鬼ハンターとしても墮落している青年と、生真面目な吸血鬼の話。ピクシブにもあげています。

「少しは仕事したらどうなんだ? 私の家にきたと思つたらなんだ
火に当たるだけなんだな、君は」

「仕事だの何だのうるせーなあ、もう。良いじゃないかこの際。寒
いのは人だらうと吸血鬼だらうと一緒にだらうが」

「この寒いのに外なんか出歩いていられるか、と暖炉の前から動こ
うとしない青年に、彼はその暗闇のよつたな色の髪をくしゃりとかき
あげた。

暖かみのある赤の炎の前で、銀髪の青年は「あー生き返る」と
間抜けな声を上げつつ、暖炉の前で緩んだ顔をしていく。

非常に腹立たしい。

「クルースニーク、君は自分の立場を 仕事を、使命を理解してい
るのか?」

「してるよ。だからこのクソ寒い中ほつつき歩いてたんだらうが」「
なら何故暢気に暖炉の前で暖をとつてるんだ」

「寒いからに決まつてんだ。お前は寒いときに氷水でも浴びるの
か? 浴びねえだろ」

普通は火に当たるぜと彼の顔も見ずに青年は返し、全くこれだから
ら冬は嫌になるよとぼやいた。

暖炉のついでに何かあつたかいもん飲みたい、と図々しくも要求
し始めた青年に、聞こえるように舌打ちをすると、彼は台所に引つ
込んだ。

暖めた血でも出してやろうか、と思つたが、貴重な栄養源をこの
忌々しいクルースニークに提供(とう)名の嫌がらせ)をするのもバ

からしく、少し考えてホットワインを出すことにした。

勿論、限界まで沸騰させてやるつもりである。

舌でも火傷させてやるつかとイライラしながら彼はワインと小さめの鍋を取り出し、ワインを火にかけた。

背後では、暖炉の前から動かない間抜けな青年の声が響いている。

「冬のは良くなえよ。寒いし、歩きにくくし、何より娘さん達の露出度が低くなる」

「年中色狂いのくせに何をふざけたことを。君は春夏秋冬関係ないだろうが」

「いいや。やっぱ夏だ。暑いと開放的な気分になるじゃありますか。いやー、冬場の鉄壁の『一ト一色氣も味氣もありやしねえ』

「知性の欠片もない話だな」

彼がそう返せば、ハツ、と鼻で青年はその言葉を笑い飛ばし、「クドラクにそう言われるとはねえ」と肩をすくめた。

「綺麗な娘さん見て襲うのはお前もだろ。血イ抜かねえ分、俺のがマシだ。いや、命意の上だから俺は襲つてないのか」

「その品性のない口を慎め」

「おお怖い」

楽しそうに笑うクルースークはやはり暖炉から離れようとしない。いつそ薪のようにくべてやるつかとも思ったが、後始末と臭いの不快さに悩まされるのが容易に想像できたから、限りなく不味いホットワインを飲ませることで手を打とうと彼は塩を手にとつて、鍋の中につっこんだ。

「君のような奴が何故クルースニクなのか、未だに理解に苦しむよ。私が今まで遭遇したクルースニクは、君とは正反対だった。君みたいに大酒呑みでも賭博中毒でも色狂いでもなかつたよ、無論な」

「ああん？ クルースニクだって人だよ。酒だって飲むし博打もするし女の子と遊んだりもするぞ」

聖人じやあるまいしそんなつまらない生活は「めんだね」と青年は楽しそうに笑う。

「大体、生まれた時に体にくつついてたお袋の一部で人生決められちゃたまんねえよ。お前もそうは思わないか？ クドラーさん？」

赤だか白だか知らねえけどさ、と青年は頬をかく。

白い羊膜を付着させたまま生まれた者はクルースニクという、クドラー いわゆる吸血鬼 を退治する使命を持った者となる。銀髪の青年は、このクルースニクだった。クルースニクにしてはあんまりにも堕落した生活を送っているが。

一方で、赤い羊膜を付着させて生まれた者は、人の血を吸い生きる闇の化け物クドラーとなつて、クルースニクと戦う運命を与えられる。彼の方は、このクドラーとしてこの世に生を受けていた。

「君は本当にどうしようもないな。クルースニクとしては最低だ……いや、人としても屑だな」

「そりや良いや。気が楽だ」

使命とかめんどくさいだけだし、と言い切った青年に、最近のクルースニクは平気なのだろうかとクドラーは思つてしまつた。

色々と浅からぬ因縁のある相手とはいえ、ここまで堕落したのを見ると不安にもなる。

「喰つてるモンが血だつてだけだろ？俺はクルース二クもクドラクもどうでもいいよ」

「そんなことを言つクルース二クは先にも後にも君だけだな「事実だろ。肉喰つて魚喰つて、命喰つてるやつがガタガタ言つことじやねえし。血だつて似たようなモンだろ」

羊膜が白とか赤とかじやなくて桃色とかなら何になるんだろうなとクルースニクらしくないクルースニクは笑つた。

「俺なんか平和主義だつてのによ、勝手に人に使命押しつけられるんだぜ？クドラクと殺し合いなんて勘弁願いたいよ。俺の使命は“クドラクを狩ること”じやねえ、“女の子を可愛がること”なんだからな！」

「……それでこの『クソ寒い中ほつつき歩いて』いたのか？」
「当たり前だろ。使命に季節は関係ねえよ」

寒すぎて誰も居なかつたけどなア、とぼやいた銀髪の青年に、クドラクの青年は黙つて塩入りのホットワインを渡した。
サンキュー、と礼を言いながらそれを口に含んだクルースニクの青年は、少し経つてから酷く顔を顰め、不味いにも程があると呻いた。

「いくら酒好きの俺でもこれは酷い……鬼だなお前」

「吸血“鬼”だからな」

「俺が平和主義じやなかつたら、お前今じろる棺の中だよ」

「君のような怠惰なクルースニクに退治されるほど、私は弱くないぞ」

「そりかもな」

適當な返事をした青年は、あつちーなコレ、と間抜けなことを言
いながら不味いワインを啜る。この世の中にこんなに馬鹿なクルー
スニークがいるとは思わなかつたと呴いた彼に、何にでも例外はある、
と青年は胸を張つて答えた。

「激マズとはい、ホットワインをクルースニークに振る舞つてゐるお
前が言えたことじやないだる。お前も馬鹿だよ」

「君と同類とは心外だな」

「はつはつは」

「顔を思い切りしかめた黒髪の青年に、銀髪の青年はいい氣味だと
げらげら笑つた。

やはり火にくべるのが正解だつただろつかと彼は思つ。

「怖い顔するなよ」

「不快な顔をしているだけだ」

「不快さならこのワインは格別だぜ。飲むか?」

塩入りのそれが入つたマグカップを揺らした青年に、君が飲みた
いと言つたのだから君が責任もつて飲むと良い、と黒髪の青年は淡
々と返した。

塩を入れてくれなんて言つていないと言つた青年にちよつとした
サービスだと彼が言えба、いらねえサービスをアリガトウ、と嫌み
つぽく返される。

「人の家の暖炉を長々と奪うからだ」

「奪つてねエよ。借りてただけだ。俺は可愛い娘のハートしか奪わ
ないつて決めてんだよ。可愛かつたら人だらうが悪魔だらうがクド
ラクだらうが奪つてやるよ」

「いざれにしろくだらないな君は。全世界のクルースニークに土下座

したらどうだ」

私が見てきたクルースニクはもっと高潔で誇り高かつたぞ、と言つたクドラーに、クルースニクはケラケラと笑う。

「お前と俺が正反対の立場だつたら誰も不思議に思わないのにな！
説教好きのクドラーのお前に、三拍子揃つて肩のクルースニクの俺
！笑い話だぞこれは！」

クルースニクのくせに未だにクドラーを退治したものない自分の片割れに、黒髪の青年も同意を返す。

「全く笑えない笑い話だ 何故私と君が双子なのだろうな…」
「神様のお茶目ってヤツじゃないですかね、お兄さん？」

殺しあう運命を課されたのにもかかわらず、暢気に笑う弟に、「
だとしたら迷惑な『お茶目』だな」と兄は呆れたように笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384ba/>

クドラクとクルースニク

2012年1月8日20時48分発行